目次

はじめに　『源偶篇』・『源氏大和詞』と『源氏目案』……五

第一部　調査研究篇……一一

一　語句から見た『源偶篇』と『目案』の類似性……一三
1　所在不明の語句をも『源偶篇』はそのまま踏襲する……一七
2　本文と異なる『目案』の語句と『源偶篇』の関係……一八
3　万治版『目案』に拠った可能性のある『源偶篇』……二〇
二　註解から見た『源偶篇』と『目案』の類似性……二一
三　巻名傍記から見た『目案』と『源偶篇』の類似性……二五
1　巻名傍記の誤りが『目案』と『源偶篇』と共通するもの……二六
A　『目案』における巻名傍記の記載漏れ……二六
B　『目案』における巻名傍記のズレ……二七
C　『目案』における拾遺……二八

D　万治版『目案』の巻名傍記と一致する『源偶篇』……二九
2　『源偶篇』独自の巻名傍記の誤り……三〇
四　『源偶篇』独自の語句……三一
1　巻名傍記……三三
2　語句　三四　A　誤写　三四　B　重複　三六　C　拾遺　三八
3　註解　三九　A　誤写　三九　B　註解の特徴　四〇
五　承応版『目案』の本文と注釈……四三
1　本文について……四三
2　注釈について……四五
六　『源氏大和詞』の位置……四六
1　語句……四七
A　『源偶篇』の誤写等の修正　四八　B　新たに立てた語句　四九
2　註解……五二
A　註解の拡充　五二　B　独自の註解　五四
3　和歌の増補……五七
4　挿絵について……六五
七　新資料『源氏大和詞絵巻』（仮称）について……七二

八　むすび……七四
〈文献〉……七六
第二部　影印篇……七九
『源氏大和詞』……八〇
『源氏大和詞絵巻』（仮称）……一三一
あとがき……一四九

はじめに　『源偶篇』・『源氏大和詞』と『源氏目案』

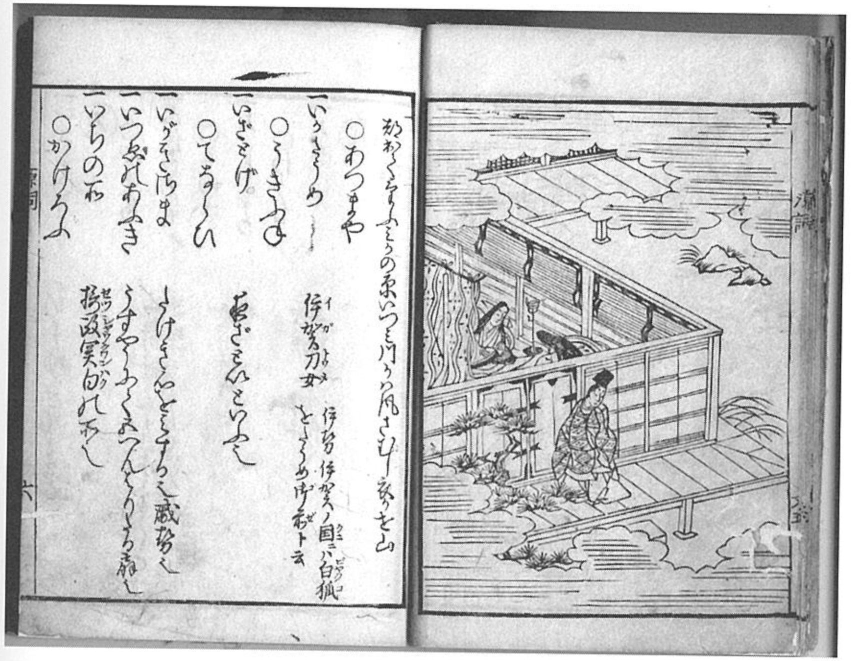
『源氏大和詞』は、筆者不明ながら契沖『源偶篇』（貞享二年奥書、写本）を版本化したものであることはよく知られている。事実、収載語数は『源偶篇』が九八七語で、『源氏大和詞』は九九一語と僅かに四語を上回るにすぎない。また見出し語句及びその註解も『源氏大和詞』は『源偶篇』のそれをほぼそのまま踏襲していることが明らかである。しかしその反面『源氏大和詞』は註解を増補し、さらに證歌（三八首）を加えるなど、必ずしも『源偶篇』と同じと言い切れない。さらに何よりも『源氏大和詞』の大きな、そして独自の特徴は、『源偶篇』の「源氏故事詞分」を除いた上で、当時しきりに作られていた絵入本にならって、挿画（三〇図）を入れ、より一般向けに仕立てている点にある。池田利夫氏は次のように言う（『契沖全集』第九巻解題　昭和四九年　岩波書店）。

> 憶測を以てすれば、この本は、何人かが源偶篇の草稿もしくは写本を入手し、それに幾許かの筆を加えて書名を改め、契沖のあずかり知らぬままに印行されたのではなかったろうか。

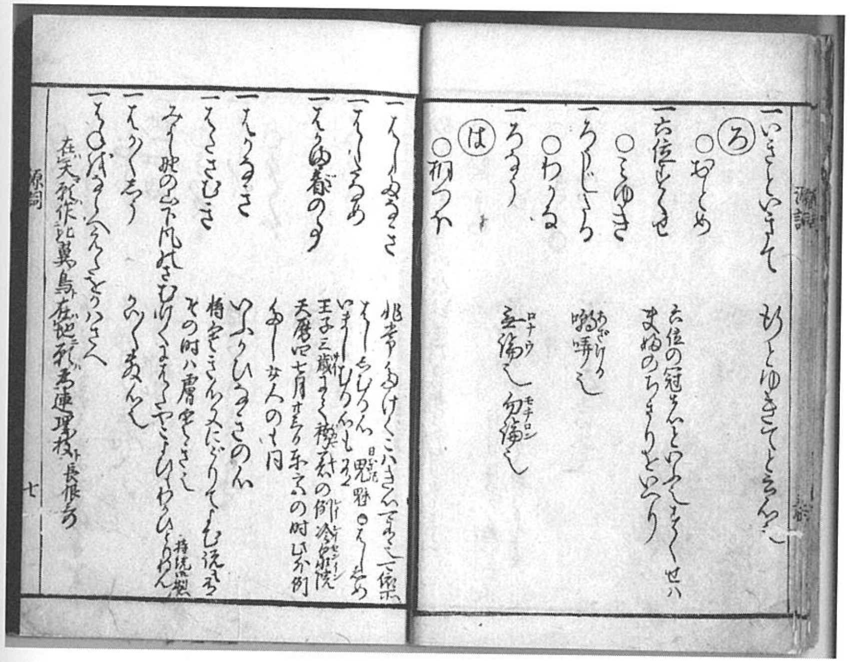
恐らく、『源氏大和詞』の出版の事情は池田氏の推測の通りであって、厳密に言えば「この版本のどこにも契沖の名がなく、自筆本に見る奥書もない」（池田氏、前掲書）以上、本書は著者未詳とすべきであろう。にもかかわらず本書が契沖の著作と目されるのは、前述したように『源氏大和詞』が『源偶篇』に依拠していること明白だからである。ところで池田氏は『源氏大和詞』の特徴として次の点を指摘する。箇条書きにして整理する。

1　本文は、（略）全く源偶篇と同じであり、それに若干の改竄を加えた内容である。

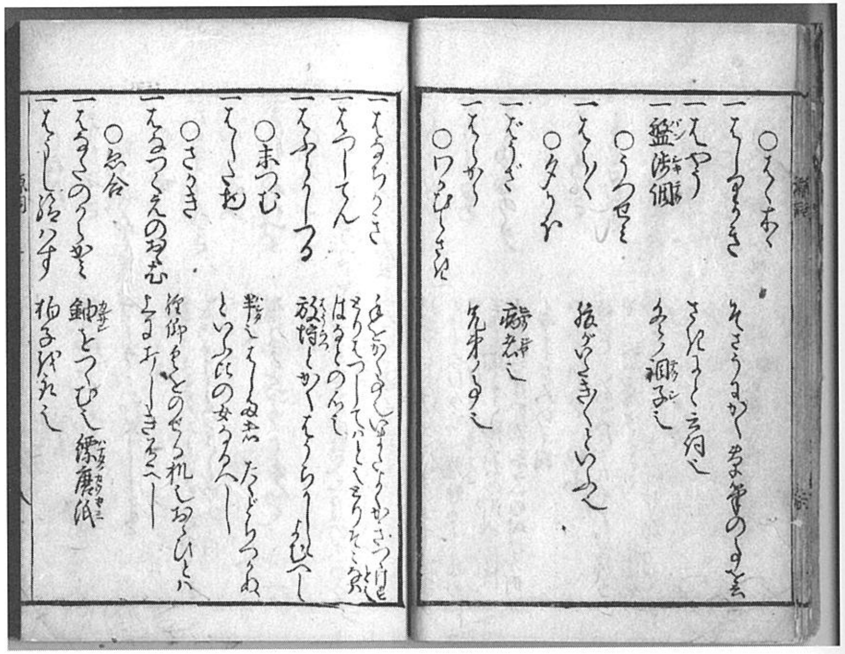
2　増補の中で比較的多いのは、掲出された源氏語句の注のあとに、往々それを含む短歌を例示する。



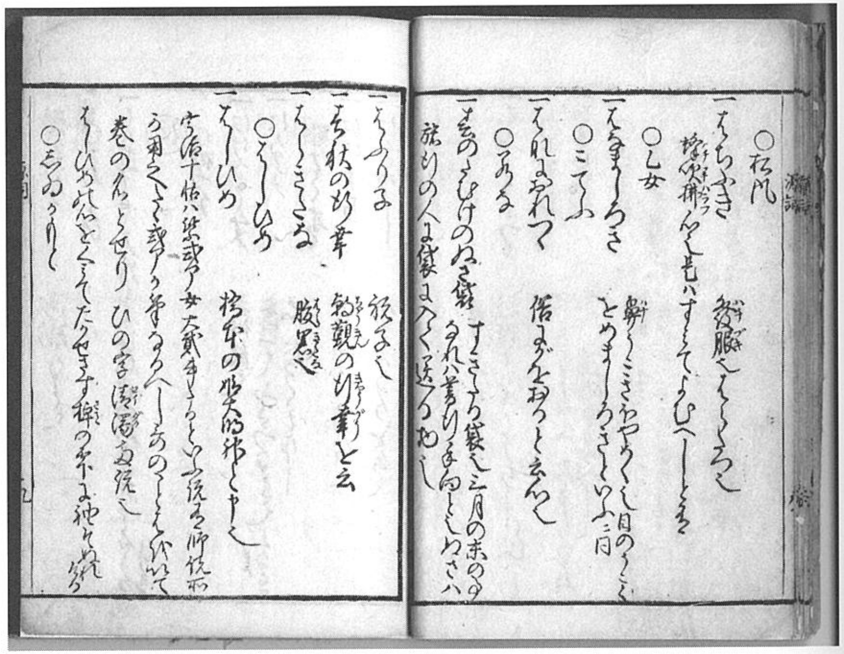
6丁オ　　又5丁ウ



7丁オ　　6丁ウ



8丁オ　　7丁ウ



9丁オ　　8丁ウ